

2017 年度国際ユース作文コンテスト

【子どもの部】 佳作

空
(原文)

山口 美莉 (14 歳)

東京都

大田区立大森第六中学校

私は雲が好きです。真っ青な空に浮かぶぼっかりした丸い雲、一面が白い布で包まれたように広がる優しい雲、逆に一面がもくもく重なったようなふくらんでいる雲、あたりまえだけど雲は同じ形、色、大きさになることは一度もありません。だからこそ私は、雲を見ると少し寂しい気持ちになります。もうこの雲たちを見られる日はない、しかし雲はそんなことおかまいなしにゆっくりと進んでいきます。

私が沖縄へ旅行へ行ったときの事です。その日はずっと海で遊んで、帰りに小さなイタリア料理のお店でごはんを食べました。そのお店は西側が海で、窓から夕焼けと海を眺めることができました。まだ夕日が水平線の少し上にあるくらいのとき、父と海に出て夕日の写真を撮りました。太陽と海がオレンジ色にキラキラ輝いていて、とても感動したのを覚えています。

そして夕食を食べ終えて、車に乗ろうとしていた時です。ふと真上を見上げると、夜の空と夕方の空が混じったような青い空に、ピンク色の雲が浮かんでいて、私はしばらくその雲を眺めていました。すると突然、この雲の先には何があるんだろうという何とも言えない衝動に駆られて、私は走り出していました。お店の東側へと西側にはちょっとした雑木林があり、私は早くあの先が見たいという一心で雑木林を走りました。

一面が開けると、世界が変わったかのように光輝いていました。そして、さっきのオレンジのキラキラした光とは違い、赤、紫、黄色、たくさん色が混ざったような情熱的な雲が海の上にありました。

しばらくそんな空を独り占めしていると、なぜか寂しい気持ちになりました。もちろん初めはとても感動しました。でも、胸がしめつけられていきました。そして確実に、あの情熱的な色はあせていきました。真っ赤だった雲は次第に黒く染まっていき、あの景色は夢だったんじゃないかと思うまででした。

夕焼けは、一瞬しか輝かない、そして雲は絶えず進んでいく、それが寂しさの原因だったと思います。それは空、雲に限ったことではなく、人間もそうだと私は考えます。人はいつか終わりがあり、その終わりがいつ来るかは分かりません。だからこそ、夕焼けのように輝けるときは精いっぱい輝く、つまりやるときは全力でやる、楽しむときは精いっぱい楽しむことが大切だと思います。実際、いつ

かは終わりが来ると思うと、そう生きていきたいと思いませんか？

しかし頑張っている、辛いこと、嫌なことはたくさんあるでしょう。そんなときは空を見上げてみて下さい。雲はゆっくりと少しずつ進んでいます。そんな雲のように少しずつ前へ進めばいいと思います。

自分の人生を最高に楽しむ、そして少しずつでも前に進む、私は大きな大きな空から大切なことを学びました。